



**SSKU**  
**脳損傷・高次脳機能障害**

# サークルエコー

**VOL.52 (2013年5月)**



(写真) 大阪の2つのグループホーム 左：ホームおおみの65、右：らしんばんの家 (p2~8)

## サークルエコーは.....

事故や病気によって脳に損傷を受けると、新しいことが覚えにくくなったり、意欲が低下したり、感情のコントロールが難しくなるなどのため、社会生活の様々な場面で問題が生じることがあります。このような後遺症を高次脳機能障害といいます。目に見えにくい障害のため、社会の理解を得にくいこと、したがって現行の福祉制度を利用することが難しい点が大きな問題となっています。

サークルエコーは、高次脳機能障害をとりまく問題の中で、特に、日常生活にも援助が必要な人たちの問題に取り組んでいます。

ブログ <http://circleecho.blog.fc2.com/>  
ホームページ <http://www.circle-echo.com/>  
(会報がカラーで見られます)

## 目次

- ・特集：  
高次脳機能障害の人たちのグループホームを訪ねて (大阪編)..... 2
  - 「ホーム おおみの65」  
(堺市 社会福祉法人こころの窓青い鳥)
  - 「らしんばんの家」  
(豊中市 社会福祉法人豊中きらら福祉会)
- ・コラム：65才になるということ (2)..... 8
- ・動 向..... 10
- ・活動報告..... 11

- ・発行：サークルエコー
- ・〒206-0824 稲城市若葉台 3-1-1  
ワルツの杜C-405 田辺方
- ・電話：042-350-3292
- ・E-mail: [kako.m.d.t.1201@nifty.com](mailto:kako.m.d.t.1201@nifty.com)

## サークルエコー 寄稿 高次脳機能障害の人たちのグループホームを訪ねて (大阪編)

土本亜理子 (ノンフィクションライター)

サークルエコーは、2008年秋の10周年記念合宿を皮切りに、毎年の合宿で「語ろう会」を開催し、住まい・暮らしに焦点をあてて話し合いを重ねてきた。その中でよく出ていたのが「グループホームがほしい」という声だった。他の高次脳機能障害関連の集まりでも、たびたび語られる「グループホーム」だが、愛知県豊中市の「NPO法人 笑い太鼓」のほかは、全国的にみても、その設立はほとんど進んでいないようである。

そんな中、大阪府の知事重点事業「高次脳機能障がい者社会復帰支援事業」で4ヶ所のグループホームが設立されることが決まったと聞き、注目していたのだが(エコー会報 vol.48 p.8)、2012年12月、そのうちの2ヶ所が相次いで開所したという。今回、ライターの土本亜理子さんに、その2つのグループホームについてのレポートを寄稿していただいた。親の立場、支援者の立場から語られるその内容は実に興味深く、示唆に富んだものであった。

その後、あと2ヶ所のグループホームの設立が決まったという情報を納谷さん(「なやクリニック」院長)、山河さん(「工房 羅針盤」施設長)からいただいた。一つは、かつて納谷さんが理事長を務められた事業団によるもの、もう一つは、「医療法人 光愛会」が高槻市にオープンするもの。「工房 羅針盤」では、高次脳機能障害者支援のため、以前から交流してきた「光愛会」からの依頼で、スタッフ実習が始まっているということだった。府の発表どおり、府内4ヶ所で、当事者が、支援者が、様々な暮らし、様々な支援を展開していくことになる。注目していきたい。

(田辺 和子)

### ■「ホーム おおみの65」(堺市 社会福祉法人こころの窓青い鳥)

#### ～利用者家族 納谷敦夫さん 納谷保子さんに聞く～

大阪府堺市の閑静な住宅街にある庭付きの2階建て住宅。入口には、この家のもとの主の表札がそのままあり、ポストに「ホームおおみの65」と記されていた。

社会福祉法人「こころの窓青い鳥」が運営するグループホームで入居者は5人(男性)、高次脳機能障害と発達障害の人が利用している。日中は作業所などそれぞれの活動の場に通い、ホームでは夕食以降の時間をともに過ごす。食事作りを担当するスタッフが入り、その他、夜間は支援員1名が泊まり込んで支援にあたっている。

入居者の1人、Kさん(38歳)のご両親、納谷敦夫さんと保子さんからお話を聞く機会を得た。敦夫さんは精神科医、保子さんは小児科医、夫妻は現在クリニックを開業されている。この「ホームおおみの65」は、納谷さん一家の元自宅。敦夫さん曰く「長年暮らしていた家を息子付きで法人に貸し出し」、夫妻は近くのマンションに転居して、親子別々の暮らしをスタートさせた。初めての経験から約3ヶ月。これまでの経緯と今の心境をうかがった。



ご家族で

#### 【新居から元の自宅、息子が住むホームを眺めて】

「ここから息子のグループホームの屋根だけは見えるんですよ」

納谷さんが高層階にある新居の窓辺から眼下の町を見ておっしゃった。

息子のKさんは、1999年、大学院生になったばかりの24歳の時にバイク事故で受傷し、脳外傷のため意識不明に。その後リハビリで1年半入院。退院時の状態は保子さんの記録によれば、「目はうつ

ろで、発声もなく、座る事もできず、ただただ唯一動かせる右手で、体中を掻きむしるばかりでした。目もおかまいなく掻きまくるので、一時も目が離せない介護の日々」だったという（『一步一步 脳損傷エッセイ集』より）。

今、ひどく掻くという行為はいくらか収まっているものの、夜、時おり叫ぶ、布団を蹴飛ばしてしまうなどもあって、ホームへ入居するまで、保子さんが医師としての仕事をしながら毎晩Kさんの隣に寝て、見守りやケアを続けたという。そうした疲労がたたったのか、保子さんが大病を患う。治療を得て回復したが、この頃から夫妻はKさんの日中活動の場、ショートステイ先、そして「親が年老いて介護できなくなる前に安心して任せられる終のすみかを見つける」ことを真剣に考えるようになったという。



「一步一步 脳損傷エッセイ集」

### 【大阪の医療行政に20年携わり、その後開業へ】

Kさんが事故にあった当時、納谷さんは大阪府の医療対策課長として医療行政に携わっていた。時代は、病院から在宅まで切れ目のない支援をとという「地域リハビリテーション事業」が動き出し、納谷さんも息子さんのリハビリに力を入れていた最中だった。そこで、当事者家族の視点も動員して、地域リハの充実へ。2001年に始まった高次脳機能障害のモデル事業にも大阪府として手を上げ、参加した。

もっとも当初、高次脳機能障害が精神障害に位置づけられたことに対して、納谷さんは反対の立場を表明していたという。「息子のことで事故後に関わったのは、救命救急の医者、脳外科医、リハビリ医。精神科医はどこにも出てこない。精神科医で高次脳や脳損傷のことを知っている医者はおりませんよと、だいぶ反対したんですよ」

しかし、高次脳機能障害を学ぶうちに、脳損傷と精神障害の薬の使い方の重なる点、リハビリ、就労支援なども含めて、自身の専門でもある精神科医療が、高次脳に関わる意味を新たに見出し、開業して本格的に取り組む必要性を感じたのだそうだ。

納谷さんはその後、地域保健福祉室長2年を経て、2002年に健康福祉部長を4年間勤め、2006年からは大阪府障害者福祉事業団の理事長を2年ほどなさった後、還暦を機に行政から離れ、2007年に堺市内で「なやクリニック」を開業。精神科と小児科の診療所で、翌2008年には高次脳機能障害の人を対象とした精神科デイケアを立ち上げ、現在はとくにリハビリに力を入れているという。

「高次脳の人たちは身体障害も持っていることが多い。息子は左半身麻痺ですが、リハビリにはPTさん（理学療法士）が必要です。STさん（言語聴覚士）もOTさん（作業療法士）も参加してくれたので、いろいろな形でリハビリができています」（納谷さん）

### 【堺脳損傷協会を設立して】

夫妻は開業に先立つ2006年、「堺脳損傷協会」（保子さんが会長）を設立して、定例会や各種のセミナーを開き、またインターネットも使ってさまざまな情報を発信している。

協会をつくった一番の理由は、必要な情報が手に入らなかった経験からだと聞いた。

とくに最初の頃に困ったのは日中活動の場を探すことだった。Kさんは中途障害のため、知的障害があるにもかかわらず療育手帳はもらえず、身体障害者手帳しか得られなかった。身体障害者のデイケアを見学したが、行った先は老人ばかり。若いKさんには合わない。身体障害者の授産施設に行くと、脊

損などで車椅子の人たちが熱心に作業していて、そうした仕事に取り組むことが難しいKさんの利用は無理だった。



なやクリニック ミーティングルーム

紆余曲折の末、知的障害者のデイケアに通所できるようになったが、制度の狭間で立ち往生することが多かった。次の課題はショートステイ先を探すことだった。しかし、重症心身障害者施設に見学に行くと、「身障手帳と療育手帳がなければ利用できません」とにべもない。2006年に障害者自立支援法が施行され、障害種別があまり問われなくなっていくらか道は拓けたものの、「(医療者の)ぼくたちでもわからへんのやから、他の人はさぞわからんだろうなあ。それがきっかけで協会を作ったんです」と、納谷さん。

### 【グループホームがほしい！】

Kさんのショートステイ先を探した時のこと。身体障害者対象の療護施設に行ってみたが、個室が並んだ病棟のようなところで、自分で声を出せない、希望を伝えられない、絶えず見守りが必要なKさんにとっては不向きに思われた。「Kはおとなしいから基本的には放っというたらなんぼでも手を抜ける子なんです。ちゃんとみてもらうには人数が少ないところがいい。グループホームがいいなと思ったんです」(保子さん)

自分たちでNPO法人を立ちあげ、グループホームを作ることも考えたという。しかし、スタッフの雇用など費用面で行き詰まるのが容易に想像される。それであれば、社会福祉法人に自宅を安く提供して、ホームを作ってもらおうというのはいかがでしょうか。夫妻は、Kさんが通っている作業所を運営する法人にあたってみた。そのうちの1カ所が話に乗ってくれた。もっとも準備などもあるので「3年先には…」という話だったそうだ。

ところが、納谷さんたちの協会や、同じ府内の「若者と家族の会」などが一緒に「親なき後」のキャンペーンを展開したこともあって、府が国から予算を取り、高次脳機能障害に特化したグループホーム4カ所を予算化。平成24年度中に設立という話で、急遽開設する運びとなったのだとか。「ホームの建物は自宅を貸すという話でしたから、自分たちはあわてて近くのマンションに引っ越したんです。元の家には鍵をつけたり、収納庫がないから本棚をつぶして作ったり、2階にもお風呂を作ったり、台所のガスレンジが危ないからIHにしたり…。それらの改築は法人の責任でやられました」(納谷さん)

### 【グループホームの利用料は？ 暮らしの変化は？】

現在、Kさんは日中、市内3ヶ所の作業所に通い、夜間は月～木曜日までホームで過ごし、金～日曜日までの3日間は家に帰るといった生活を送っている。ホームでの夜間の生活は当初支援員が2名(現在は1名)当直するなど手厚い支援があった。利用料は、家賃、食費、設備費、光熱費などでひと月5万円余り、他に3ヶ所の作業所への交通などがかかるが、国からの家賃補助が1万円あり、障害年金1級7万円のうち、残り1万円くらいが小遣いになるようになっているそうだ。

ホームの名称は、納谷さんたちの自宅の住所をそのままとって「ホームおおみの65」となった。かつてイギリスで研修医生活を送った納谷さんは、彼の地のケアホームがみな地番で呼ばれていたことを思い浮かべた。「家」に地番があるのは当たり前。「家」に特別な名称を付けること自体、不必要なこと。その発想に共感したのだという。法人も地番の使用を採用してくれた。

保子さんは、「息子が新しく名前を覚える必要がなく、『ホームは何て言うの?』と聞くと、『おおみの65!』って。自分の家なので馴染みもあってよかったと思っています」

暮らしの変化はどうなのだろう。昨年12月の利用当初は、持病のアトピー性皮膚炎の薬の塗り方が支援員にうまく伝わらなかったのか、皮膚をかきむしって傷が悪化するなどもあったが、現在は情報が共有でき、そうしたことも収まった。

親の暮らしは?とかがうと、保子さんは「夜間の時間が少し自由になった」そうだ。「私は作業所の送迎なんかで、結局、毎日息子とおうてますから、大きな変化はないですが、晩はいないからぐっすり眠れるようになりましたね」

「ぼく(の変化)は夜、外で食事ができるようになったことですかね。2人で行ったり、友だちと食べたり。今までは外で一杯呑んでも、Kをお風呂に入れる9時半までには絶対に帰って!と言われて(笑)。それが少し今日は遅くまでいけるかなあとか」(納谷さん)

### 【60代から考えたい「子どものこれからのこと」】

「今後は堺脳損傷協会として堺市にあといくつかグループホームを作ってくださいと要求せないのかなと思っています」と、納谷さんは次の課題を話された。「それまでホームに興味なかった人が、ホームについて聞かせてくれと。そういう声も出ています」

保子さんは会員の気持ちに思いを馳せられた。「みんな、グループホームって具体的にどういうふうに住らすことになるのか知らないでしょう。せやから不安なんですよ。親離れ、子離れが難しい。とくに障害を持っている子どものことで熱心な親は、『自分たち以上のことはどこもしてくれへん』と思っているから。自分らが動いている間はやっぱり預けたくない、という思いが強いですよ」

しかし納谷さんは、親が60代になったら子どもの先行きを考えてほしいと語る。

「ぼくらは家族をいっぱい見っていますが、70代になってからだと、ちょっとしんどいんじゃないかな?個人差がありますけれど」

最後に、そうした情報を共有できる場である「堺脳損傷協会」の今後の課題をうかがってみた。その1つは、「当事者の会」を作ることだそうだ。

「うちはどちらかと言うと親の会が主なので、当事者ももう少ししっかりしてもらわんとね」と納谷さん。保子さんも同じ思いだ。「当事者が主導権を握って何かをするより、どうしても親が連れてくる人が多くて、親やボランティアが主導して手取り足取りなんです。もうちょっと自律性をもった当事者の会ができたらいね、というのが課題ですね」

「それと、子どもの会もいるわな。親が高次脳になったうちの子どもたちの会。これもほしい。そしてグループホーム。次に続かないかなと思います」(納谷さん)



なやクリニック 外観

\*

後日、納谷さんから、かつて理事長をつとめた大阪府障害者福祉事業団が、大阪で4つ作る計画のあるグループホームの1つを担うことになったとうかがった。このため月1回、事業団では高次脳機能障害の研究会を立ち上げ、事例検討会などが行われるようになったそうだ。納谷さんは顧問として関わられているとお聞きした。

## ■「らしんばんの家」(豊中市 社会福祉法人豊中きらら福祉会) ～「工房 羅針盤」施設長 山河正裕さんに聞く～

「らしんばんの家」は大阪モノレールの柴原駅から徒歩10分。住宅街にある三階建ての瀟洒な家だ。リビングダイニングの他に8部屋ある大きな家で、一人住まいをされていた方がケア付きの住宅へ移ることになり、借りることが出来たそうだ。入居定員は8人。しかし現在は開設まもなく、スタッフの体制づくりも含めてあらゆることが初めてなので、利用者6人(全員男性)からのスタートとなったという。



工房 羅針盤 ポスターの一部

このグループホームを開いたのは、豊中市内で「工房 羅針盤」と「第2工房 羅針盤」という作業所を運営している社会福祉法人豊中きらら福祉会だ。2つの作業所の利用者は114名(2013年2月現在)、そのうち高次脳機能障害者は60名近くになるという。「工房 羅針盤」の施設長で、ホームづくりに奔走した山河正裕さんに、開設までのいきさつと、現在の状況についてうかがった。

### 【2年前のクリスマスの頃に】

高次脳機能障害の人たちのためのグループホームがほしいと山河さんが強く思ったきっかけは、2年前のクリスマスの頃に起きたある出来事からだった。

「とくに高次脳の方の親御さんの負担が目に見えるようになってきましたね。今うちの作業所を利用している方なのですが、ご本人さん(30代)がすごく暴れるんです。その方を60代半ばのお母さんが1人で面倒みてはったんですが、もうヘトヘトで、クリスマス頃、肺炎になってしまったんです。病院に行ったらお医者さんから『お母さん、入院しなさい』と言われたんですが、お母さんは息子を私がみないといけない……と悩まれて。その時に市役所の方にご本人さんのショートステイをお願いしたら、市内に立派な施設はあるのですが、『高次脳機能障害の人は対応したことがない』という理由で預かってもらえなかった。結局、苦肉の策でお母さんの入院中、ご本人さんは身体的に悪いところはないのに、精神科に入院してもらった形になったんですね。」



「工房 羅針盤」施設長 山河さん

本来は福祉制度で対応すべきところを医療に頼らざるを得なかった。しかも、こうした問題は1度の病院利用では終わらないことが予想される。

「息子さんがまた暴れたら、面倒をみるお母さんが頻繁に倒れてしまう。もう次はない。なんとかグループホームを作らないといけないなということになりまして、次の年の12月、つまり1年後にここ(らしんばんの家)を立ち上げることができたのです。」(山河さん)

### 【家探しを困難にする「わからない怖さ」、必要な啓発活動】

山河さんたちは昨年4月、作業所の利用者家族に集ってもらい、ホームの設立計画を伝えた。すると20名ぐらいの人が、「今すぐに利用したい」と手を上げた。だが、全員の入居は難しい。そこで山河さんたちは選ぶ基準を設けた。

「まずご両親がいらっしゃらない方。つまり、お父さん、お母さん、どちらかがいなくて1人でみているご家庭を中心に人選せざるを得なかったんです。それから重度の方。今、入居された方の中に重度の方は3人いて、大きな声が出る方なんです」

その人たちが安心して暮らせる家、そして近隣の住民にとっても安心が提供できる家、そうした家として、「地域の住宅街にある鉄筋コンクリートの建物」という条件があがった。しかし物件探しは難航した。地元の理解を得ることも難しい。

「まず第一に、高次脳機能障害についての『わからない怖さ』がありましたね。障害者のホームは必要だと思っても、自分のところには…という拒否感があると思うんですね。それに加えてどんな障害の人が来るんだといった時に、私たちが『高次脳機能障害です』と言うと、『そんなの聞いたこともない!』と」

現在の物件は家主の理解を得るのに時間がかかったが、借りることができた。しかし地元の理解も得ることも含めると、3ヶ月間ぐらい大きな力を注ぐ必要があったという。



らしんばんの家 リビング

「最初はよく思われていませんでしたけれども、だんだん自治会長さんとか、お話するうちに、『人ごとやないんやな』とご理解いただけるようになりました」

山河さんたちはホームの開設に限らず、これまでも高次脳機能障害をテーマにした啓発活動を何年も行ってきたという。1,200~1,300人の市民が集まる大掛かりなチャリティコンサートもすでに4回開催。「知らない怖さ」をどのように克服するか。これまでの蓄積が、ホーム作りの大切な土台にもなっているようだった。

### 【ホーム開設、24時間の関わりを通して知ったこと】

ホームの開設から約3ヶ月。山河さんたちにとっての収穫は何だったのだろうか。

「1つは、ご家族の話をよく家庭訪問などで聞いていたつもりだったのですが、やっぱりこのホームに来て初めてご家族の言葉では説明がつかない部分があったんですね。

たとえば、夜中に起きてしょうがないとか、あるいは作業所では日中はすごくニコニコされる方が、奥さんに聞くと家では物を投げて、鬼の形相で暴れるんだとか。私たちはいつもニコニコされるその方をみているので、奥さんの話がぴんとこない。その方が今ホームに入っているのですが、昼間の顔と夜の顔がこれほど違うものなのか、というのを私たちもわかったというか…。今までの日中のわずか6時間ぐらいの支援で全部わかっていたかのように、ご家族にえらそうなアドバイスをしていましたけれど、本当に恥ずかしい話です。やっぱり24時間みていると、いろんな情報が入ってきますので連続した支援ができるようになるんですね。その人が今まで生きてきた人生経験や人間関係、今置かれている環境、嗜好も含めて障害に反映されるものだと思うんです。ですから、そういうふう人間をみないと障害に対してのアプローチはやったとしても難しい。本来の支援にはなっていないのだろうと思います。そういう意味では1日6時間ではなくて、1日24時間ちゃんと見ることができ環境が必要かなと思いました」

ホームのスタッフには、高次脳機能障害の当事者も参加されていると聞いた。

「スタッフの体制で一番大きいことは、当事者の方にも職員として入っていただこうと決めたことでした。今、ホームは8人の職員がいますが、5人はうちの作業所に通っている利用者で、就労にとっても近い方だけれど企業とのマッチングがうまくいかない方たちに働いてもらっています。中には元コックさんだった方もいます。高次脳機能障害なのですが作ってくれるご飯がおいしいんです。就労に近い、そこまで一懸命障害と向き合って、乗り越えてきた経験をされてきた方たちだからこそ、同じ障害で今苦しんでいる方の手助けができるのではないかと、ホームができればそれを活かさない手はないだろうと、今『障害者雇用』という形を使ってやっています」

### 【グループホームが増えていくために必要なものは】

利用する人にとっても、そこで働く人にとっても、グループホームは社会復帰をめざす「生活リハビリ」の場となっている、山河さんのお話からそのことを強く感じた。

「高次脳の方、中途障害の方もそうですが、一定の社会経験がある方で、障害が原因で今は社会から離れているけれども、それをもとに戻す。これは非常に大事なポイントだろうと思うんですね。うちで働いている方もそうですが、自分の役割の場、自分の居場所があると、私たちが横から小手先で支援をするよりも、それだけでメキメキと自信がつきます。環境整備がすごく大事なのだろうと思います。『メモを取りなさい』とか、横で口うるさく言うよりも、自分のステージがあれば、人に言われなくてもなさいますよね」

そうした作業所やホームが増えて行かない。最後にその理由を山河さんに訊ねてみた。

「ホームを作るのは場所とお金があればできます。ただ、日中通える場がないので、ホームを作った場合必然的にホームが日中も面倒をみなけなければならないんですね。そうすると日中もみる職員が必要になるけれど、その職員が雇えない、ホーム運営が赤字になってしまう…。あるいは日中スタッフを雇うのをやめて、昼間は当事者だけにしたらどうか。それについてはやはり何かあったらどうしようかという意見が出ますよね。そうした心配と不安が先立って、ホームを作ろうにも作れない。ホームは人とお金があって作れるというものではなくて、やはりもっと別の社会資源がないことに2つ（日中活動と夜間の生活）が両立しない。つまりホームを増やすだけでは本質的な解決にはつながらないのではないかと思います」

\*

先に紹介した納谷夫妻の息子さんはホームで過ごしているが、日中は3ヶ所の作業所に通っている。社会資源の有効な連携が必要という山河さんの指摘が具体的に理解できた。大阪ではあと2カ所、ホーム開設を計画している。その展開の中にこの先の障害者の暮らしを支える具体策の、問題点も希望も見えて取れるのではないだろうか。大阪に限らず、生活リハビリ、社会復帰の支援を根幹に据え、かつ安心して生活できる場としてのグループホームや日中活動の場づくりが、全国規模で必要だとあらためて強く感じた訪問だった。



らしんばんの家 キッチン



## ■ 65才になるということ (2)

東京都武蔵野市 高橋俊夫

妻は3月の中旬から週1日のペースで介護保険利用施設のデイサービスを利用し始めました。自立支援のデイサービスは週2日でしたが、とりあえずそのうちの1日を介護保険施設へ通所することになったのです。

行政からの説明では問題が無ければ、半年くらいの間完全に移行できればよいのではないかと思います。すでに合計10日の通所になりますが、特に今までと変わった様子はなく、穏やかな表情で添乗員の誘導で送迎車への乗り降りをしています。デイの現場ではどんな表情で過ごしているのか、いつかは見学したいと思っています。

問題と言えば、初日の昼食時ちょっとした報告がありました。急いで食べたためか一度飲み込んだものを、むせてしまって戻してしまい、なにも食べずに終わってしまったということです。この辺のことは自宅でも度々あることなので、事前に話はしていたのですが、やはり言葉だけではうまく伝えられなかったようです。連絡帳があるので自宅でのやり方を具体的に書いてお渡ししましたが、その後は上手く行っているようで安心です。こうしたことも本人が自分の感じていることを相手に伝えられれば解決は早いのですが、様子を察することでしか周りが気づけないところが歯がゆい所です。

また送迎の時にはよく顔の表情見るようにしていますが、今までと車が似ているからか、場所が変わること、高齢者が多い所等一応説明しているからか、障害福祉サービスの時と変わらない雰囲気です。帰ってきています。「楽しかった?」と聞くと「うん」とはうなずきますが具体的に話せないのが、この辺も歯がゆい所です。

介護保険施設を利用するまでは、本人同伴で3箇所の事業所(いずれも社会福祉法人)の見学、介護認定のための症状説明・申請、ケアマネージャー(介護支援専門員)、地域包括支援センターの職員等への状況説明と本人面談、介護被保険者証の受領(介護認定結果記載)、ケアプランの作成、事業者との契約等、順を踏んできました。今後はケアマネージャー等と随時、相談の機会を設け、連携をとりながらその時どきに必要な通所以外のサービスも検討していくようにしたいと思っています。



**妻の通う施設の全景**

介護老人福祉施設、短期入所生活介護、デイサービスセンター、居宅介護支援事業所等の業務がなされています。

### 2013年6月～8月 活動予定

えこーたいむ・・・・・・・・6/22、7/27、8/24

多摩工コー・・・・・・・・随時

ナノ«三郷市»・・・・・・・・随時

フレンズ«瀬戸市»・・・・・・毎週、月曜、水曜、金曜、土曜

## <Blog「えこーぷれいす」から> 『う〜ん』



2月末に妻からもらった風邪を2週間ひき、嘔吐、熱に苦しんだ、おさむしさん。少し痩せた。毎日、普通のおかゆや梅おかゆ三昧に明け暮れ、間食も出来ず、過ごしていました。姿も格好もおじいさん?になってしまい、おさむしおじいちゃん?なんて呼ばれています。

風邪が治っても、度々、嘔吐を繰り返すようになり、でも症状は言えず。家族の中では『わけ分からん病』が始まった〜と。3月の終わりに集まった「えこーたいむ」もやっところさの足取りで代表宅へ。途中休みながら、途中で自宅に引き返そうと思ったり、代表宅に行ってソファで横になり眠り、少し回復。

ですが、また体調が悪くなると前ぶれもなく、嘔吐。なんでしょう。症状が言えないことは家族にとっても大変です。目が離せません!

決してドラマではありません。(笑)

※おさむしのことは当会のブログでも <http://circlecho.blog.fc2.com/> (田川マ)

## <お知らせ>

### ●「子<sup>むすび</sup>結(仮)」つくります。

2013年4月27日、脳損傷者の親を持つ若者の集まりが田辺さん宅で開かれました。昨年10月の合宿で、同じような年齢で親が受傷した二人が出会い、お互いに感動したことがきっかけです。

脳を損傷した家族を持つ若者が悩みを共有したり、自分たちの居心地の良い場がない、若い当事者と共に楽しむ場を作りたいという話となり、サークルエコーは継続的に集まりの場を持つことにしました。詳細は次号でお知らせします。



おむすび  
子結キャラクター原案  
(菅野さん作)

### ●第1回 北多摩南部医療圏 高次脳機能障害地域支援研修会〜地域をつなぐ〜

- ・主催：東京慈恵会医科大学附属第三病院 リハビリテーション科
- ・日時：2013年6月16日(日)、13時00分〜
- ・会場：東京慈恵会医科大学医学部看護学科1階大講堂
- ・基調講演：阿部 順子氏「高次脳機能障害者の生活上の困難と支援のあり方」

### ●第2回 高次脳機能障害 実践的アプローチ講習会(全3回シリーズ)

- ・主催：NPO法人東京高次脳機能障害協議会(TKK)
- ・日時：2013年8月11日(日)、10時45分〜
- ・受講料：1回3,500円
- ・会場：東京慈恵会医科大学西新橋校大学1号館
- ・講師：渡邊 修氏、太田玲子氏、田谷勝夫氏、安仁屋衣子氏
- ・詳細、申込方法、受講料の振込先など詳細は <http://www.brain-tkk.com>

## 動 向

### 〜 国の動き 〜

- 平成25年3月29日  
年管管発0329第1号「国民年金・厚生年金保険障害認定基準の一部改定に伴う診断書の項目改正について」発出(6月1日〜適用)
- 平成25年4月1日  
「障害者総合支援法(障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律)」施行。
- 平成25年4月19日  
「障害者の雇用の促進等に関する法律の一部を改正する法律案」、及び「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律の一部を改正する法律案」が国会に提出される。
- 平成25年5月6日  
「障害者差別解消法案(障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律案)」が国会に提出される。

### 〜 東京の動き〜

- 平成25年6月26日〜28日  
高次脳機能障害支援事業関係職員研修会

## サークルエコー行事&会合報告

- 2/23 えこーたいむ(会報51号印刷発送作業)・・・武蔵野プレイス(田辺2、西田2、高橋2、田川3、山崎、廖、高橋マ、仲栄真さん2)
- 2/24 高次脳機能障害講演会(支援者向け)・・・狛江慈恵大第三病院(田辺)
- 3/02 講演会「言語聴覚士からみた高次脳機能しょうがい」・・・国立市民総合体育館(高橋2)
- 3/06 打ち合わせ・・・稲城(田辺、山崎)
- 3/08 TTK 高次脳機能障害相談室・・・狛江慈恵大第三病院(田辺)
- 3/10 TTK 家族相談交流会・・・狛江慈恵大第三病院(田辺)
- 3/10 TTK 定例会 & 懇親会・・・狛江慈恵大第三病院⇒国領/花の舞(田辺、高橋2)
- 3/12 TTK 高次脳機能障害相談室・・・狛江慈恵大第三病院(田辺)
- 3/13 TTK 実践的アプローチ講習会 会場下見・・・慈恵医科大西新橋校(高橋2)
- 3/15 TTK 高次脳機能障害相談室・・・狛江慈恵大第三病院(田辺)
- 3/17 マリン横須賀・・・ゆんるり(田川)
- 3/22 TTK 高次脳機能障害相談室・・・狛江慈恵大第三病院(田辺)
- 3/23 えこーたいむ・・・高橋宅(高橋2、田川3、山崎)
- 3/23 高次脳機能障害相談室・・・稲城市マルシェいなぎ(田辺)
- 3/26 TTK 高次脳機能障害相談室・・・狛江慈恵大第三病院(田辺)
- 3/26 第8回 難病当事者による難病当事者のための勉強会・・・明治学院大(山崎)
- 3/26 打ち合わせ・・・明大前(田辺、山崎)
- 4/07 水彩連盟展・・・国立新美術館(高橋2、村田3)
- 4/09 TTK 高次脳機能障害相談室・・・狛江慈恵大第三病院(田辺、高橋)
- 4/09 第9回 難病当事者による難病当事者のための勉強会・・・明治学院大(山崎)
- 4/09 打ち合わせ・・・明大前(田辺、山崎)
- 4/12 TTK 高次脳機能障害相談室・・・狛江慈恵大第三病院(田辺)
- 4/13・14 脳損傷ケアリングコミュニティ学会・・・横浜ラポール(田辺、土本さん)
- 4/13 JD 障害と高齢 WG・・・新宿区立障害者福祉センター(山崎)
- 4/14 ナノ祭り・・・三郷市文化会館(西田2、高橋2、谷口3、田辺(健)3)
- 4/17 JD 政策委員会・・・新宿区立障害者福祉センター(山崎)
- 4/21 マリン横須賀・・・ゆんるり(田川)
- 4/22 コア打合せ・・・稲城市田辺宅(田辺、高橋2、西田2、山崎)
- 4/27 えこーたいむ(総会)・・・稲城i(あい)プラザ(田辺、西田2、高橋2、田川3、山崎、廖)
- 4/27 脳損傷者の親を持つ若者の集まり・・・稲城市田辺宅(田川マ、菅野さん、田辺、山崎)
- 5/12 TTK 高次脳機能障害実践的アプローチ講習会・・・慈恵医科大西新橋校(田辺、高橋2、山崎)
- 5/13 第10回 難病当事者による難病当事者のための勉強会・・・明治学院大学(田辺、山崎)
- 5/13 障害者映像イベント つながり映画祭『夜明け』(原題「天亮了」)・・・渋谷(田辺、山崎)
- 5/14 TTK 高次脳機能障害相談室・・・狛江慈恵大第三病院(田辺)
- 5/17 国際セミナー2013 フランスにおける障害者就労の政策潮流とヨーロッパの近未来・・・参議院議員会館(山崎)
- 5/18 社会保障研究会・・・明治学院大(山崎)
- 5/19 マリン横須賀・・・ゆんるり(田川)
- 5/20 第1回練馬区高次脳機能障害者支援連絡会・・・練馬区中村橋(山崎)
- 5/24 TTK 高次脳機能障害相談室・・・狛江慈恵大第三病院(高橋)

### <「えこーめーる」から>

T: Sさん。その後、いかがですか。将嗣さんもお元気ですか。この前は、同級生にあたたかく囲まれたお話でしたね。また、よいことも悪いことも聞かせてくださいね。

S: 有り難う御座います。2月が誕生日だったので、3カ所かけらる、携帯をプレゼントしました、約1ヶ月、(今日来る、何時間ごろ)など携帯に入ってきます、連絡がとれて、嬉しいです、これからいくね、待ってるよ～なんて携帯すると、恋人と連絡してるみたいで、心浮き浮きです。

T: すご～い!! 携帯を使えるなんて。我が息子には望むべくもないですが、でも、それぞれですものね。でも、ずっと前のお話を思い出すと感無量です。また、お会いするのが楽しみです。

S: ヤハリ何か、忘れず居るんですね、孫がビデオをみる、と言ったら、巻き戻して～等でもトイレ、お茶、ご飯など言えなく、我慢我慢です。焦らず頑張ってます。



ご機嫌です

## <定期総会報告>

4月27日に定期総会が開催されました。決算報告するとともに、任期満了により役員の変更がありましたので紹介いたします。前役員を中心に検討を重ね、今年度から共同代表という体制をとり、幹事の役職も一部再編成することになりました。直接、運営に携わる世話人(コア会議メンバー)と変更のある役職は以下ようになりますので、よろしくお祈いします。

- ・共同代表…田辺 和子、山崎 光弘
- ・副代表…西田 宏美、田川 真理子、西田 吉廣
- ・幹事…総務：高橋 俊夫、西田 孝次、今仲 芳昭  
 会計：西田宏美、田川三枝子
- ・会計監査…高橋 俊夫

平成24年度決算報告書  
 (平成24年4月1日～平成25年3月31日)

単位：円

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前期繰越金	296,695	活動費	304,475
会費	417,000	通信費	36,124
寄付金	112,000	電話料	29,820
雑収入	800	印刷費	64,955
受取利息	55	消耗品費	106,737
合宿参加費	135,500	旅費交通費	60,830
		雑費	4,085
合計	962,050	合計	607,026
		次期繰越金	355,024

【会計監査役(村田淑子)による監査済】



ご支援ありがとうございました。



2013年3月～2013年5月までにご寄付、賛助会員費をお寄せくださった方々です。(順不同、敬称略)

柴田 玲子 中田 文枝 佐藤 佳枝 岩城 弘子 野村 三枝子 長瀬 せい子  
 金崎 善子 矢田 正幸 吉田 笄子 守屋 紀子 平野 よう子 谷田部 良子  
 西田 均 水野 正憲 鶴田 成子 橋本 紀子 斎藤 紀久男 五味田 美恵子  
 谷田 伸枝 山田 春美 綿森 淑子 広川 幸子 吉川 ひろみ 七五三 いよ子  
 沢田 真智子

### ◎ 入会のご案内 「正会員」

入会金 1,000円  
 年会費 3,000円

◎ 今年度も賛助会費のご協力よろしくお願いいたします。  
 年会費(4月～3月)1口 2,000円

郵便振替 口座記号番号 00180-0-546112 サークルエコー

編集人 東京都稲城市若葉台 三十一 C-四〇五  
 脳損傷・高次脳機能障害 サークルエコー  
 発行人 東京都世田谷区砧 六一二六―二二 定価は会費に含まれる  
 特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会 定価 百円

### 編集後記

今年度より会報担当となった山崎です。不慣れな点が多々あるかと思いますが、皆様どうぞよろしくお願いいたします。2年ほど前から飲み仲間と一緒に登山に行っています。今年の最終目標は、南アルプス 北岳、日本で二番目に高い山。この春は花見も出来ず、体力も落ちているので、時間ができたらトレーニングを兼ねて高尾山に行つてこようと思います。

Yamazaki

### サークルエコー連絡先

田辺 和子 〒206-0824 東京都稲城市若葉台 3-1-1 C-405 Tel/Fax:042-350-3292  
 谷口 眞知子(ナノ) 〒341-0044 埼玉県三郷市戸ヶ崎 2193-1 Tel/Fax:048-956-2224  
 豊田 幸子(フレンズ) 〒489-0987 愛知県瀬戸市西山町 1-60-20 Tel/Fax: 0561-82-1498